

リオテイント対日鉄鉱石出荷 50 周年記念式典

リオ テイント チーフ・エグゼクティブ サム・ウォルシュ
東京

2016 年 4 月 7 日

Check against delivery

(和訳)

ご来場の皆様、ありがとうございます。光栄にもまた東京に戻ってきました。

私は今晚ここに来るまで、多くの長い橋を渡りながら、何度も東京を旅したことを思い出していました。ここから少し離れたレインボーブリッジもその一つです。

その橋にも、それ以外の日本の多くの橋にも、そこに少しでもオーストラリアの存在が有るとしても驚きではありません。

今から半世紀前の 1966 年 8 月、鉄鉱石のトライアル・カーゴを積んだ「太刀川丸」、そして契約ベース第一船の「邦雲丸」が、オーストラリアのダンピア港から日本へと出帆しました。

この日本とリオ テイントの間の最初の鉄鉱石の船積みという素晴らしい出来事を、今夜お祝いしたいと思います。

先駆者たちが強いビジョンを持っていたこと、大きなリスクを克服したこと、互いの敬意と信頼に支えられた深い関係を作り出したこと、その全てが祝福に値します。

しかし私達の「旅」は、実はその何年も前から始まっていたのです。

旅はまず、それまで 20 年にわたって禁止されてきた鉄鉱石輸出を、政府が 1960 年に解禁したことに始まります。元々オーストラリアには、国内需要を賄うだけの鉄鉱石すら無いのではないかとされていたのです。

旅の始まりには、古い考え方に基づく懸念を排除することが必要だったのです。

それによって、日本がその驚異的な成長に必要な鉄鉱石をオーストラリアから輸入する道が開かれたのです。同時にそれは、西オーストラリア州の急速な産業の発展を支えるものとなりました。

全ての鍵は、日本の製鉄各社が鉄鉱石購入の長期契約締結を約束したことにありました。その時点ではまだ、鉱山の開発、鉄道の敷設、そして数百キロ離れた港の建設もなされていませんでした。

それは英雄的とすら言える約束でしたが、それが私達の関係の始まりであり、その関係がいまだに続いているのです。

その引取契約は、16 年間で 6550 万トンという、当時オーストラリア企業が締結したものとしては最大で、画期的なものでした。当時の契約書は今日ここに展示されています。

その契約のお蔭で、開発に必要な資金の確保が可能となり、最初の鉄鉱石鉱山が西オーストラリア州のマウント・トム・プライスに建設されました。この最初の鉱山は依然として生産を続けており、ダンピア港も今でも出荷を続けています。

日本は鉄鉱石の購入を約束しただけではありません。日本は鉱山ならびに鉱石の出荷に必要なインフラ設備の建設にも直接的に寄与しました。

日本なしでは、私達が現在のようにワールド・クラスの鉄鉱石ビジネスを行うことはできなかったといっても過言ではありません。私達は日本のサポートを決して忘れません。

2 年前、私はピルバラ地区の私達の鉄鉱石鉱山にオーストラリアと日本の両首相をお迎えする名誉にあずかりました。

その時、安倍首相は、政界に入る前に製鉄会社に勤務していたが、鉄鉱石鉱山を見る機会は無かったとおっしゃいました。

首相のご訪問は、私達の鉄鉱石が辿る道をお見せする素晴らしい機会となりました。ピルバラから日本に運ばれた鉄鉱石は鉄となり、更に、この素晴らしい国で私達が目にする建物や橋、自動車へと姿を変えているのです。

また日本で作られた鉄は、日本のイノベーションと専門技術によって鉱山用トラック、ショベル、タイヤ、レール、船などに加工されてピルバラに戻り、さらに鉄鉱石を採掘し日本に輸送しているのです。そしてこのサイクルは続きます。

初期のピルバラ地区の開発は、日本の驚異的な経済成長を支えただけでなく、オーストラリアが現在の姿となる助けとなりました。

またリオ テイントにとっては、日本の関係者の皆様と現在のような多面的なパートナーシップを構築する礎となりました。私達にとって日本は、顧客であり、サプライヤーであり、多くの操業やプロジェクトにおけるパートナーであり、イノベーション・パートナーであり、また友人でもあります。

1961 年、リオ テイントと日本の製鉄各社及び商社が東京に集い、日本にオーストラリアの鉄鉱石を供給するというアイデアを話し合いました。その時、日本側は、それが二つの国の間に「長い橋」をかけることになるとおっしゃいました。

私は、まさしくそうなった、或いはそれ以上のことが成し遂げられたのではないかと思います。

何十年もの時間を共にし、私達は経済的な関係のみならず、個人的な関係も築き上げました。私は、まず自動車産業で、続いてリオ テイントで日本の皆様と一緒に仕事をし、日本の皆様から学ぶことができましたが、その関係は特別なものと自負しています。

互いを信頼し協力するというその関係こそが、共に成功するための礎となったのです。

私達が、オーストラリアと日本の産業界の関係のみならず、二国間の長期的な友好関係に貢献できたことを、私はとても嬉しく思っています。

個人的なことですが、多くの皆様をご存知の通り、私は 7 月 1 日にチーフ・エグゼクティブの職を退任し、リオ テイントでの 25 年の勤務を終えます。私は、リオ テイントを業界をリードする強いポジションに戻すことに貢献できたのではないかと自負していますが、同時に、日本の皆様との「旅」の一部を共にすることができたことを嬉しく思います。私の後任で

RioTinto

あるジャン-セバスティアン・ジャックは、今日ここに来ることはできませんでしたが、皆様とこの旅を続けるべく、追って来日したいとの意向です。

私達は、何十年も前にピルバラ地区で共に一歩を踏み出し、長い道のりを歩んできました。その道は時に険しいものでしたが、お互い助け合い、支え合いながらここまでやって来ました。私は、皆様とこの旅が今後も続いていくことを確信しています。

皆様、本日ここにお越し頂きありがとうございます。

ダンピアから日本への最初の船積みはもちろんのこと、私達が築いた「長い橋」をお祝いしたいと思います。

これまでの半世紀にわたるパートナーシップの下で共に歩んできたその橋が、これから 50 年、それ以上にわたって私達を導いてくれることでしょう。

本件に関するお問い合わせ先：

リオ テイント ジャパン 株式会社

渉外・広報部

坂口 ジェニファー

T (03) 3222 2446

M (080) 2128 5793

RTJenquiries@riotinto.com

www.riotintojapan.com

media.enquiries@riotinto.com

www.riotinto.com



Follow @RioTinto on Twitter

Media Relations, EMEA/Americas

Illtud Harri

T +44 20 7781 1152

M +44 7920 503 600

David Outhwaite

T +44 20 7781 1623

M +44 7787 597 493

David Luff

T +44 20 7781 1177

M +44 7780 226 422

Investor Relations, EMEA/Americas

John Smelt

T +44 20 7781 1654

M +44 7879 642 675

David Ovington

T +44 20 7781 2051

M +44 7920 010 978

Grant Donald

T +44 20 7781 1262

M +44 7920 587 805

Media Relations, Australia/Asia

Ben Mitchell

T +61 3 9283 3620

M +61 419 850 212

Bruce Tobin

T +61 3 9283 3612

M +61 419 103 454

Matthew Klar

T +61 7 3625 4244

M +61 457 525 578

Investor Relations, Australia/Asia

Natalie Worley

T +61 3 9283 3063

M +61 409 210 462

Rachel Storrs

T +61 3 9283 3628

M +61 417 401 018

Rio Tinto plc

2 Eastbourne Terrace
London W2 6LG
United Kingdom

T +44 20 7781 2000

Registered in England

No. 719885

Rio Tinto Limited

120 Collins Street
Melbourne 3000
Australia

T +61 3 9283 3333

Registered in Australia

ABN 96 004 458 404

Rio Tinto Japan Limited

8F Kojimachi Diamond Building
4-1 Kojimachi, Chiyoda-ku
Tokyo 102-003, Japan

T +81 3 3222 2411

Registered in Japan

No. 0199 01 086953